

ラグビーワールドカップがやってきた

日本代表が史上初のベスト8に進出するなど、日本中が熱狂の渦に包まれた「ラグビーワールドカップ2019™日本大会」は、44日間にわたる大会を大盛況のうちに11月2日に幕を閉じました。

神奈川県内では横浜市港北区の「横浜国際総合競技場」で6試合が開催され（1試合は台風のため中止）延べ40万1千人もの観客が足を運びました。また、横浜市西区の「臨港パーク」ではファンゾーンを設け、延べ15万3千人もの来場者がありました。

開催直前まで、アジアで初開催の大会ということで心配される声もありましたが、ふたを開けてみれば全国各地で盛り上がり、日本の心のこもったおもてなしなど、最も偉大なワールドカップの一つとして記憶に残り、最高の開催国であったと称えられました。

キャンプ地では選手と地元子供たちとの交流など、各地で工夫を凝ら



した様々なお迎えする取り組みが行われましたが、特に印象深かったのが、参加国歌・ユニオンアンセムを歌うという取り組みでした。日本人が他国の国歌を熱唱する姿を見た選手、訪日外国人からは絶賛され、これに応えるかのように、選手による「お辞儀」が広がりました。日本でも人気があるニュージーランド代表「オールブラックス」から始まり、各チームに広まったことは、自然な流れだったのでしょうか。また、台風により試合が中止になったカナダチームが被災地釜石市でのボランティア活動も大きく報道され、試合会場以外での話題も多かったです。

さて、今回の大会を目的とした訪日外国人は40万人以上といわれていますが、大会期間中の街中も少し違った世界が見受けられました。例えば、ニュージーランドが試合を



行う日の横浜駅の朝7時過ぎ。お馴染みの黒のチームジャージをきた2人組の男性がスーツケースを持ち、談笑しながら歩いていました。早朝に日本に着いたのでしょうか、ビール片手に早くも試合モードです。また、決勝戦の試合開始約7時間前の新横浜駅。この日は新横浜駅も

も横断幕を出し歓迎モード。早くも人の群れが発生しており、写真に収めているイングランド、南アフリカのファンでいっぱいでした。街中（駅からスタジアムまで）も、ここは外国か、と思えるほどビールを片手どころか両手で歩いている外国人で溢れ返り、今回、5日間ほど会場付近を見て回りましたが、泥酔者や揉め事は全く見当たらず（場所によって荒れた所もあったそうですが）、国籍にかかわらずフレンドリーな雰囲気があちらこちらで見受けられました。今大会のために来日した外国人の多くは、日本を好きになり、もう一度訪れ日本の文化、食、人に触れたいと思い帰って行ったことでしょう。それは、今回至る所にあった日本ならではの「お・も・て・な・し」。最近急速に醸成されているボランティア精神であり、支える側としての参加意識が高まってきているからではないでしょうか。

横浜国際総合競技場前



ところで、神奈川県体育協会では、英会話を通して外国人とよりコミュニケーションを高め、オリンピックなどスポーツイベントにおいてボランティアに参加することを目指す「英会話教室」を開催しておりますが、この教室に長く参加されている方も大会ボランティアとして参加されていました。

ボランティアの仲間たち



参加されました羽藤正子さんの声

ラグビーワールドカップのボランティアに参加し、楽しく有意義な時間を皆様と共有できました。英会話力はまだまだですが、外国の方のご案内ができ、喜ばれ嬉しかったです。今後も英会話は続けていきたいです。

いよいよ今年は「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」です。「ラグビーワールドカップ」では約170万人が会場に足を運び観戦しました。神奈川県内でもセーリングが藤沢市で、野球・ソフトボール、サッカーが横浜市で、自転車競技（ロードレース）が相模原市、山北町で行われます。

是非、参加する人、観戦する人、そして、支える人、すべての人々がこのビッグイベントを体感し、堪能しましょう。